

琉球大学学術リポジトリ

カウンセラーのイメージに関する探索的研究 ―ユタ、教師との比較―

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2008-10-21 キーワード (Ja): カウンセラーの印象, ユタの印象, 教師の印象, 因子分析 キーワード (En): 作成者: 田中, 寛二, Tanaka, Kanji メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/7568

カウンセラーのイメージに関する探索的研究

—ユタ、教師との比較—

A study on the impressions of the counselors.
:Comparisons of counselors with the shamans 'yuta'
and the teachers.

田 中 寛 二

(Kanji Tanaka)

本研究は、カウンセラー養成のための基本的な資料を提供するために計画された。カウンセラーの印象をより明らかにするために、沖縄におけるシャーマンであるユタ及び教師との比較が行われた。印象を評定するために準備された40項目の尺度を用い、大学生223名に評定が依頼された。印象評定は、大学における講義時間中にクラス単位で一斉に実施された。カウンセラー、ユタ、及び教師に対する印象の評定結果では、それぞれに特有な印象が明らかにされた。印象をより詳細に明らかにするために、その評定値を用いて、因子分析を行った結果、5つの因子が抽出され、「信用」「人あたり」「評価」「性別」「視点」と命名された。5つの因子ごとに、カウンセラー、ユタ、及び教師への印象を比較し、各々の職業の特徴を考慮して、カウンセラーに対する印象の特徴について検討し、この知見のカウンセラー養成過程における利用価値が検討された。

Key words: カウンセラーの印象、ユタの印象、教師の印象、因子分析

1. はじめに～背景と目的

カウンセリングに対する期待は、様々な領域において年々高まりつつある。例えば、教育界、産業界、司法・矯正界など、日常の業務の中でカウンセリングの考え方や方法が大いに活用されている。とりわけ教育界において強調されている、いわゆる「カウンセリング・マインド」はその典型であろう。

現在のようにカウンセリングに対する関心が高い風潮の中では、そのおとりを受けてカウンセラーを志望する人々が増加しているように思える。また、心理学に関する専門的な教育を系統的に受けたことのない人々（例えば教師など）が、カウンセラーを志すこともままあるように思える。

このような風潮にあるにもかかわらず、カウンセラー養成に関連する基礎資料が十分に整っていないのではないかと痛感する機会が多い。これまでのカウンセリングに関する研究はアセスメント及び治療・援助に関する実践的なものが主流であったように思われる。例えば、カウンセラーに対して、一般の人々がどのような印象を抱いているのか、という基本的、実証的な資料は少ない。とりわけ、沖縄県における資料はほとんど見あたらない。したがって、そのような資料を整備するための研究が必要であると痛感する。

他方、最近、多文化主義（multiculturalism）がカウンセリングの第四勢力として台頭し、注目されるようになってきている（Pederson, 1991）。

これまでのカウンセリングに関する理論、方法論などはほとんどが欧米からのいわゆる輸入品であり、わが国独自の理論及び方法論は少ない。しかも、いわゆる直訳的な導入の仕方をしている。そのためか、理論や方法論の研究成果が、実践の場で十分に活用され難いと感じることもある。それは、日本という文化を十分に理解した上での理論や方法論ではないからかもしれない。また、日本文化に当該理論あるいは方法論を位置づけようとする努力が不足していたからかもしれない。

ところで、日本の中で沖縄県は、その他の地域と気候・地理的条件、歴史・文化的条件がかなり異なっており、そのことから生活習慣などにかな

りの独自性が認められるという報告が多い。すなわち、文化的に独自性が高いと言い換えられよう。この視点に立つと沖縄における文化の意味を再度確認しなければならないことになる。Uchenna & Ivey (1991) はアメリカ、イボ族を対象に行ったカウンセラー養成のための基礎研究において、イボ族特有のカウンセリングの訓練スタイルがあることを報告している。沖縄においても同様の指摘が可能ではあるまいか。残念なことに、そのような資料はまだ十分には整っていない。

沖縄においては、シャーマン「ユタ」の役割は重要であるという指摘が多い。とりわけ「野のカウンセラー」として、特に女性の活用が多いという報告がある(金城・大橋、1987)。金城らはユタの職能として、①運勢や計画の吉凶、実行時機の判断、②異常体験の解釈、③祖霊の意向、供養効果、系図の確認、④儀礼の執行、⑤伝統的な儀礼様式や知識の教示を挙げている。これらの職能とカウンセラーの職能とは一見大きく異なっているようであるが、ユタへの準拠深度がある程度深まれば(金城らによれば、深度Ⅳ「信仰段階」以上になれば)、些細なことでもユタに相談しなければ気が済まなくなる、と指摘している。

沖縄において従来カウンセラーの役割はこのユタが担ってきたと言えよう。しかしユタをとり挙げた心理学的研究は、職能を中心としたものが大半であり、ユタの印象を明らかにしようとした基礎的なものは少ない。

そこで、本研究ではカウンセラーに対してどのような印象を抱いているかをユタとの比較をとおして明らかにすることを目的とする。また、両者の印象をより明らかにするための教師の印象との比較を行う。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者 カウンセリングの専門教育を受けていない共通教育(教養)課程の大学生223人が調査対象者となった。

2. 材料 大学生100人に対して、「カウンセラー」「教師」「ユタ」に対してどのようなイメージを抱いているか、自由記述により回答を求めた結果及び林(1978)、伊藤(1994)を参考にして、40の評定項目を設定し

た。各項目とも意味が対になるような単語を左右に配置し、「非常に」「かなり」「やや」「どちらともいえない」「やや」「かなり」「非常に」の尺度を付した。

3. 手続き 「刺激語に対してどのようなイメージを抱くかを調べるものであり、そのために40の形容詞対を用意したので、各形容詞対において各刺激語（カウンセラー、ユタ、及び教師）に対してどの程度のあてはまるかを評定してください」という主旨の指示が与えられた後、調査は調査対象者のペースで、クラス単位で一斉に実施された。所要時間は、おおむね20分であった。

4. 調査日時 1998年2月5日～15日

Ⅲ. 結果

カウンセラー、教師、及びユタへの印象を尋ね、40の尺度によって評定を行うよう依頼した。その評定値によって主因子法により5つの因子を抽出し、バリマックス法により直交回転を行い解を得た。

その結果、表1に示すような結果が得られた。カウンセラー、教師、ユタ別に同様の手続きによって因子分析を行った。その結果、それぞれにおいて因子構造がかなり異なっていたが、本研究の主な目的がカウンセラーの印象を明らかにすることであるために、ここではカウンセラーの因子構造を採用することにした。

5つの因子別に、項目ごとのプロフィールを図1から図5に示す。その結果、3つの職業について、それぞれの因子の中で異同がかなり明確に示されている。

第1因子を構成する項目では、(16)「無責任な一責任感の強い」では、ユタよりもカウンセラーや教師の方が責任感が強いと認識されていることが示されている。また、カウンセラーは教師やユタよりも(24)「おちついていて」、(25)「静かで」、(8)「器用で」、(39)「思いやりがある」という印象が強いことが示されていると言える。

カウンセラーのイメージに関する探索的研究 (田中)

表1 因子分析の結果 (カウンセラーの印象)

		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
(16) 無責任な	- 責任感の強い	-.75				
(13) 熱心な	- 不熱心な	.70				
(29) 誠実な	- 不誠実な	.70				
(2) いい加減な	- まじめな	-.70				
(18) 意欲的な	- 無気力な	.66				
(14) 消極的な	- 積極的な	-.64				
(15) 心のせまい	- 心の広い	-.61				
(38) ふまじめな	- まじめな	-.61				
(19) 自信のある	- 自信のない	.61				
(21) 親切的な	- いじわるな	.59				
(5) 細かい	- おおざっぱな	.58				
(24) 落ちついた	- おせっかちな	.57				
(8) 器用な	- 不器用な	.57				
(22) あきっぱい	- がまん強い	-.55				
(25) 静かな	- にぎやかな	.54				
(23) 信頼できる	- 信頼できない	.54				
(30) たよらない	- しっかりした	-.52				
(39) 思いやりのある	- 思いやりのない	-.52				
(27) かたい	- やわらかい	-.75				
(32) 緊張した	- ゆったりした	-.67				
(28) つめたい	- あたたかい	-.61				
(3) 穏やかな	- 激しい	.55				
(20) 短気な	- 気長な	-.56				
(34) 安定した	- 不安定な	.51				
(37) 受容的な	- 拒否的な	.51				
(4) 好き	- 嫌い	.50				
(11) 指示的な	- 自由な	-.50				
(40) きびしい	- やさしい	-.49				
(17) 親しみにくい	- 親しみやすい	-.47				
(31) ユーモアのある	- ユーモアのない	.47				
(1) 明るい	- 暗い			.73		
(9) 開放的な	- 閉鎖的な			.67		
(7) 弱い	- 強い			-.52		
(12) 話しやすい	- 話しにくい			.52		
(26) 女性的な	- 男性的な				-.81	
(36) 父親的な	- 母親的な				.79	
(33) たくましい	- 弱々しい				.51	
(35) 情熱的な	- 冷静な					.78
(6) 主観的な	- 客観的な					.55
	固有値	13.9	2.8	1.8	1.7	1.4
	累積寄与率	34.7	41.7	46.2	50.5	54.1

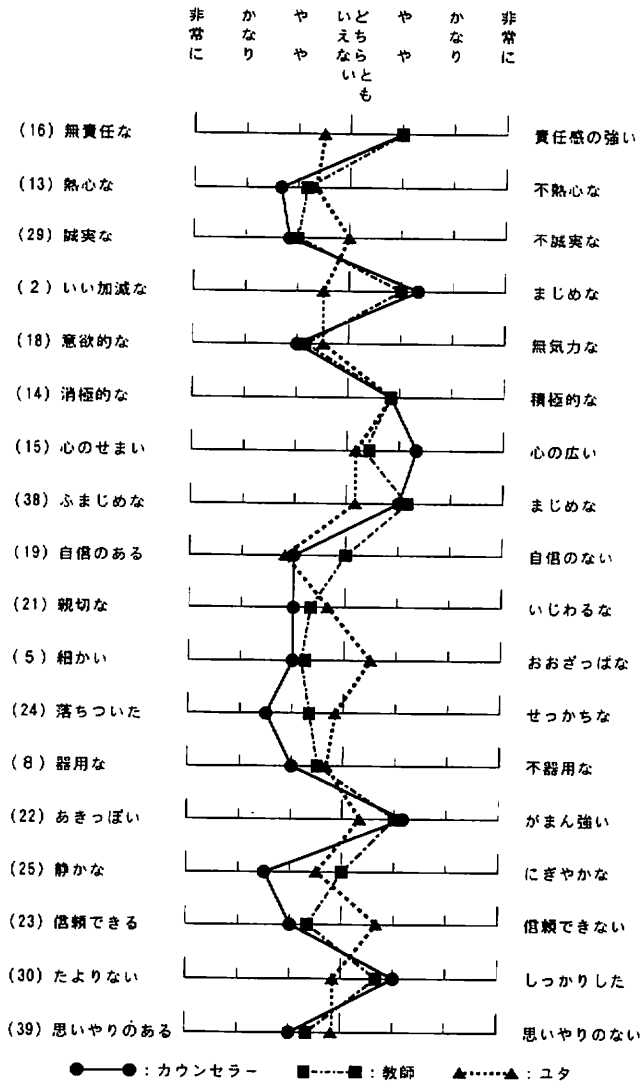


図1 印象のプロフィール(第1因子:職業別)

第2因子では、異なる特徴が多く、カウンセラーは教師やユタよりも
 (27)「やわらかく」、(32)「ゆったりとし」、(3)「穏やかで」、
 (11)「自由で」、(40)「やさしい」という印象が強いことが示された。

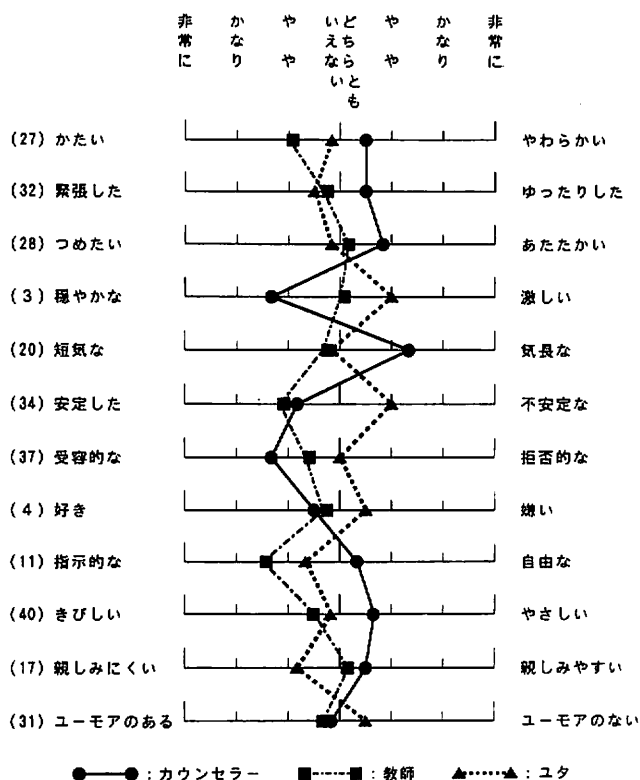


図2 印象のプロフィール (第2因子:職業別)

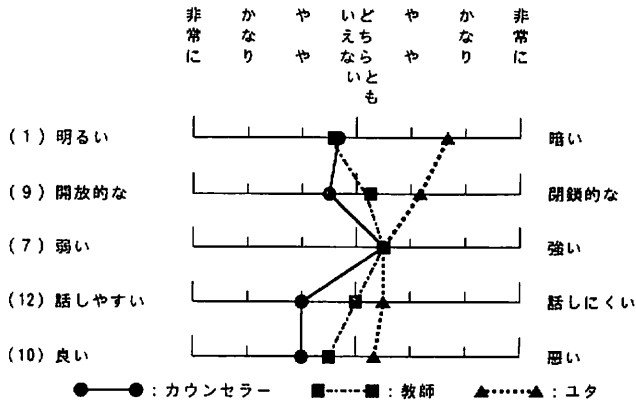


図3 印象のプロフィール (第3因子：職業別)

第3因子を構成する項目では、教師やユタよりもカウンセラーの方が(12)「話しやすくて」、(10)「良い」という印象を強く抱いていることが示された。

第4因子では、特にカウンセラーの特長として際だった面は示されていないが、第5因子では(35)「冷静で」、(6)「客観的」という印象を強く抱いていることが示された。

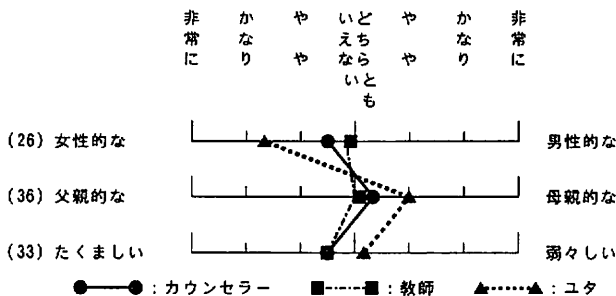


図4 印象のプロフィール (第4因子：職業別)

カウンセラーのイメージに関する探索的研究 (田中)

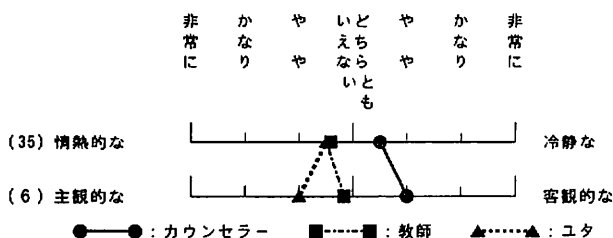


図5 印象のプロフィール (第5因子: 職業別)

各因子ごとに職業別の平均評定値を求めた結果を表2に示す。各々の平均評定値を因子毎に比較するために分散分析を実施したところ、第4因子以外でいずれも1%水準で有意な差が認められた。下位検定を行ったところ、第1因子と第3因子ではカウンセラーの評定値が最も低く他の職業と比べるとその差が有意であることが認められた。また、第2因子及び第5因子では、逆に最も高く、その差が有意であることが示された。

表2 因子別平均評定値の比較

	カウンセラー	教師	ユタ
第1因子 (18-126点)	67.47 (4.48)	70.31 (4.15)	69.57 (4.31)
第2因子 (12-84点)	48.89 (4.31)	42.38 (4.43)	48.23 (4.68)
第3因子 (5-35点)	18.17 (3.46)	19.67 (3.55)	24.08 (4.01)
第4因子 (3-15点)	11.47 (1.42)	11.37 (1.63)	11.35 (1.65)
第5因子 (2-14点)	9.48 (2.39)	7.39 (1.80)	6.45 (2.67)

※1. ()内はSD

※2. 各因子ごとに職別の平均値の比較を行ったところ、第4因子だけで、有意な平均値の差は認められなかったが、その他ではいずれも1%水準で有意な差が認められた。

IV. 考察

因子分析を実施した結果、5つの因子が抽出された。第1因子は、「無責任な－責任感の強い」「熱心な－不熱心な」「誠実な－不誠実な」「いい加減な－まじめな」「意欲的な－無気力な」など18項目から構成されていることから、『不信』と命名する。因子得点の比較から、カウンセラーに対する得点が最も低いことから、カウンセラーに対して教師やユタよりもより信用に値する存在であるという印象を持っていることが示されたと解される。

カウンセラーは、クライアントの悩み事を聞いて、それを解決するのがカウンセラーの任務であると一般的に考えられている（伊藤、1997）。そのような一般的な考えが、第三者の悩みをうち明けられて、それに対する適切な対応を必要とするカウンセラーへの信頼感が、ユタや教師よりも高いことの背景にあると考えられる。

ただし、第1因子を構成する各項目の評定値を検討すると、「積極的な－消極的な」や「意欲的な－無気力な」などの項目においては、カウンセラーとユタとの類似点が示されている。このことから、ある程度の類似点も認められる。

第2因子においては、「かたい－やわらかい」「緊張した－ゆったりした」「つめたい－あたたかい」「穏やかな－激しい」など12項目から構成されている。このことから、『人あたり』と命名する。この因子得点は、カウンセラーが最も高く、教師が最も低い。項目を検討すると、「自由な」「やさしい」「穏やかな」「気長な」「受容的な」などの項目で、教師やユタとかなり異なっていることが示されている（図2参照）。これは、カウンセラーの受容と共感の態度と関連しているように考えられる。カウンセラーは受容と共感の態度によってクライアントと面談し、治療・援助を行う。このような専門的な知識を今回の調査対象者が持っていたかどうかは判然としてないが、仮に十分に知らないにしても、カウンセラーにこのような温かく人の気持ちを落ちつかせるような印象を抱いているということはカウンセラーの役割を考える上で重要な側面であると考えられる。

しかし、カウンセラーとユタとの因子得点はかなり接近しておりそのことからこの両者の印象がかなり類似しているのではないかと考えられる。

第3因子について、「あかるい-暗い」「開放的な-閉鎖的な」「弱い-強い」など5項目から構成されていることから、『評価』と命名した。この得点は、カウンセラーが最も低く、ユタにおいて最も高かった。カウンセラーはクライアントに対して非審判的な態度で接することが重視されている。この因子の得点がカウンセラーにおいて、最も低いのは、そのような非審判的な態度の要請を反映しているのかもしれない。

第4因子では、「女性的な-男性的な」「父親的な-母親的な」「たくましい-弱々しい」の3項目から構成されていることから、『性別』と命名する。この因子の因子得点は、カウンセラー、教師、ユタそれぞれの間では有意な差は認められなかった。ただし、ユタにおいては、女性的であるという印象がかなり強いことが示された。それは、ユタのほとんどが女性である（金城ら、1987）ことによっているのかもしれない。

第5因子は、「情熱的な-冷静な」と「主観的な-客観的な」から構成されていることから、『科学的視点』と命名する。カウンセラーは教師やユタよりも冷静で、客観的であるという印象が強いことが示された。これは、カウンセラーがそのような科学的な視点によって日々の仕事をこなしているという印象によっているのではないかと考えられる。

以上のように、全体的にはカウンセラーとユタ、カウンセラーと教師の印象はかなり異なっていることが示されたと考えられる。それは、カウンセラーが教師やユタと異なった機能を有していることによっているからかもしれない。しかし、そのことは今回の研究では十分に検討することはできなかった。例えば、カウンセラーの熟知度を独立変数として加え、熟知度の高低がカウンセラーの印象に与える影響を考察することもできよう。今後の課題としたい。

V. 参考及び引用文献

林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学

- 教育学部紀要（教育心理学科）、第25号、233-247.
- 伊藤美奈子 1994 学校カウンセリングに関する探索的研究—教師とカウンセラーの役割兼務と連携をめぐって— 教育心理学研究、第42巻、第3号、298-305.
- 伊藤美奈子 1997 小・中学校における教育相談係の意識と研修に関する一考察 教育心理学研究、第45巻、第3号、295-302.
- 金城正典・大橋英寿 1987 非行への家族の対応行動と伝統文化—シャーマニズムへの依存と手がかりにして— 犯罪心理学研究 第25巻 第1号、30-49.
- Patterson,C.H. 1996 Multicultural counseling:From diversity to universality. *Journal of Counseling & Development*, Vol.74, 224-231.
- Pederson,P.B., 1991 Multiculturalism as a generic approach to counseling. *Journal of Counseling & Development*, Vol.74, 6-12.
- 玉瀬耕治 1998 カウンセリング技法入門 教育出版
- Triandis,H.C. 1996 The psychological measurement of cultural syndromes. *American Psychologist*, Vol.31, No.4.
- Uchenna,T.,& Ivey,A.E. 1991 Cultural-Specific Counseling:An Alternative training model. *Journal of Counseling and Development*, Vol.70, 106-111.
- Winkelman, M. 1994 Cultural shock and Adaptation. *Journal of Counseling & Development*, Vol.73, 121-126.